
高校生による小説の書き方 対話講座

郁也門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生による小説の書き方 対話講座

【Nコード】

N0339W

【作者名】

郁也門

【あらすじ】

男「あらすじ？」

女「まあ、必要でしょ」

男「えっと、これは小説の書き方をつらつらと書き上げるエッセイであり……」

女「カットカット！ そんなんじゃ誰も見ない！」

男「いや、結構見と思うよ」

女「良いからもっとインパクトのある紹介を！」

男「うむ。じゃあ、この作品は18禁要素を……」

女「まで、マジですんの？」

男「インパクトあるだろ？」

女「否定しない!？」

男「いや、やらないけどさ」

女「じゃなくて、えっと。この作品はモノログ形式の日本的なエッセーの形から脱却しようと思われたものです!みたいな」

男「インパクトあるね」

女「まあ、モノログがつまらないことに定評のある筆者の逃げだね」

男「うむ」

女「で、何かインパクトのあることを」

男「このエッセーはエッセーじゃないような気がするんだ」

女「そこから否定っすか」

はじめに

男「小説を上手に書きたい、ね」

女「でもまあ今までにたくさんそういうのを指南する本はあったわけ」

男「だから、基本的なことはあまり書かないと思うね」

女「必要に応じて、基本的な小説のマナーをおさらいするとは思うけどね」

男「このエッセイは対話形式になっており、一般の従来の日本的なモノログ形式ではありません」

女「具体例を多用することで簡潔に話を進める狙いがあります」

男「また、このエッセイは小説を書くにはこういう方法がある、という方法論のエッセイです」

女「よくある『小説書くならメモをとれ!』とか『夢を日記に書け!』というような自己啓発的な内容ではありません」

男「話のネタがなくなったらそれに走るかもね」

女「そして、あくまで筆者の一見解を述べたまでですから、このエッセイがすべてではありません」

男「その上で、このエッセイを参考にして下さるならば、光栄に存じます」

女「また、このエッセイに関する感想はすべて目を通しますが、すべてに返信できるとは限りません。ご了承ください」

男「一応このエッセイにおけるおまけページAppendixとして、用語のメモを残しました」

女「こちらは完全にメモですので、解説不足は悪しからずご了承ください」

男「また、このエッセイに関する間違いの指摘はいつでもお気軽にどうぞ」

女「ここがわかりにくい、という意見も参考にします。しかし、書き直すかは都合との兼ねあいによります」

男「最後になりましたが、このエッセイに訪れていただいた皆様に感謝します」

女「皆様、よい文章に恵まれますように」

APPENDIX

APPENDIX

＊＊読者の視点について

・主人公と読者（いわゆる神の目）が？同一視点（EVER17、Steins;Gate）

”？完全に不一致（古畑任三郎）

”？一部一致、一部神（逆転裁判）

・注意

？、？の差は「主人公の心情描写が無いか…？、あるか…？」の差
？、？の差は「主人公が知りえない事は描写されないか…？、描写されるか…？」の差

＊＊主人公の役割について

・主人公が大きな流れに対して？無力、しかし何らかのアクションを起こせる（Steins;Gate、涼宮ハルヒの憂鬱）

”？かなりの力を持つ、あるいは対抗できる（魔王勇者、

禁書目録）

”？自らが大きな流れを作っている（デスノート）

”？なんら干渉しない（我輩は猫である）

・注意

？、？の差は、「主人公が事件を起こしているのか、主人公以外が事件を起こしているのか」の差

？、？の差は、「主人公が事件を受けて行動をして、結果それが後々に影響を及ぼすか…？、事件を見つめているか…？」の差

？、？の差は曖昧。表立って対立できるか、出来無いか、だろうか？

・主人公の、作品世界における役回りは？メアリースー（
Vip小説？、チート系統、化物語）

” ” ？道化 （化物語、ドミノ、星新一SS）

” ” ？主体的な行動者 （デスノート、100万ドルを
取り返せ）

” ” ？象徴 （羅生門（当時の人）、砂の女（人間は
環境に適応する存在である、という象徴）、

たときに受ける、羨望の象徴）、星新一SS）

” ” ？挫折も勝利も両方する、受身の人（Steins；
Gate（？に近いが）、怪傑蒸気探偵団、図書館戦争）

” ” ？ただの観測者、神の視点の代行者（こころ（主人公
を青年とするならば）、シャーロックホームズ系（主人公をワトス
ンとするならば））

・注意

？と？、？の差は、「主人公が事件を起こしているのか…？、主人
公以外が事件を起こしているのか…？、？」の差

？？の差は、「主人公が『取捨選択』に迫られたとき、主人公の能
力で犠牲がゼロか…？、主人公にも不可避の犠牲があるか…？」の差
？？の差は、「主人公の行動を題材に、ある種の滑稽さ、愉快さを
浮き彫りにするか…？、その行動を通して、筆者の伝えたいテーマ
を伝えようとしているか…？」の差

？？の差は、「事件に直接関与しているか、していないか」の差

・一文の単位は、「て」である。

つまり時間の流れ。連鎖的な流れでありながら、同時性の無い文

を一区切りとして「、」を打つ。等位接続詞による時勢の差を「、」で表す。

■彼は起きて、歯を磨いた。

1..彼はおきるや否や、歯を磨いた。（非時制一致、二つの動作の主張）

2..彼はおきるや否や歯を磨いた。（時制一致。起きて歯を磨くまでを一連の動作として描写）

※どちらにも換言可能

比較..彼は起きて歯を磨いた。（句点の省略。一連の動作として描写している）

「なんて」

■こんな言葉を選ぶなんて、彼女は馬鹿だ。

こんな言葉を選んだ事により彼女が馬鹿だと示された。

彼女は馬鹿に違いない、というのもこんな言葉を選んだからだ。

・句読点の打ち方「、」「。」「」

わかりやすい意味の切れ目、というのは大原則。

属性的に異種の物を並べるとき。

時間の差を示すとき。

・長い主語述語をわかりやすくするとき。

例..この銀河を統括する情報統合思念体による対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース、それが私。

↓この銀河を統括する情報統合思念体による、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース、それが私。

※二個目の「、それが私」は倒置文であることを示す「、」である。

・条件の提示とそれによる説明の関係。仮定説以降の主語が省略されている場合は「、」無しも可能。

例…もしも彼が怒ったならば、手がつけられない。↓もしも彼が怒ったなら手がつけられない。

これは、日本語が英語と違ってかなり規則に甘い言語だと言うことに起因する。

英語も「,」の省略は可能であるが、基本的には省略しないし、むしろ長すぎる文を整理するために不必要でも敢えて入れるケースがある。

・譲歩構文

確かに〜だろう。しかし、一だ

表現方法Ⅱ修辞法

修飾

体言や用言の意味を限定させるためにほかの語を付け加えること。
連体修飾語、連用修飾語などがある。

修辞

言葉をたくみに用いてものを表現すること。

修辞学

アリストテレスの^{レトリック}修辞学に始まる。美辞学。

相手を感じさせるためにもっとも有効な表現方法を研究する学問。

形容詞

adjective、品詞のひとつで事物の性質・状態・心情などを表す。

名詞を修飾する限定用法、述語の中心になる叙述用法の二つがある。
赤い絵の具。Ⅱ限定

この絵の具は赤い。Ⅱ叙述

形容動詞

名詞にニアリ、トアリがくっ付いたもの。「静かなり」「泰然たり」などが存在する。

名詞修飾、述語として働く。

副詞

名詞以外の語を修飾する語。動詞、形容詞、形容動詞、副詞、および文章を修飾する。

彼は「速く」走る。

隠喩法、暗喩法

たとえを用いながらも、「ごとし」「ようだ」などを使わない方法。

直喩法

たとえば、さながら、あたかも、ごとし、などを使う方法。

動かざること山の如し、など。

換喩法

あるものを表すのに、それと密接な関係のもので置き換えること。

角帽で大学生をあらわすような関係。

蝉の鳴き声、海で夏を思わせる。

反射律

ある集合の2元の間関係 $\sim$ について、任意の a に対して $a \sim a$ が成立するとき、この関係 $\sim$ は反射律を満たすと言う。

$a \parallel a$ が成立するような $\parallel$ は反射律を満たすものであり、 $\parallel$ の関係にある右边 a と左边 a は、反射律を満たす。

対称律

ある集合の2元の間関係 $\sim$ について、任意の a 、 β に対して $a \sim \beta$ 、 $\beta \sim a$ が成立するとき、この関係 $\sim$ は対称律を満たすと言う。

推移律

ある集合の2元の間関係 $\sim$ について、任意の a 、 β に対して「 $a \sim \beta$ 、 $\beta \sim \gamma$ 、ならば $a \sim \gamma$ が成立」するとき、この関係 $\sim$ は推移

律を満たすと言う。

元

集合の要素。それ以上簡単なものに分析できないもの。

Tom is as tall as all his classmates.

Tall 「Tom $\geq$ A ; A $\in$ classmates」

統語論

syntaxics

1、記号論で、記号間の関係を研究する部門。カルナップの言う論理的統語論は、意味を無視して記号の間の形式的な関係を研究する。
2、語・句・文の構成に内在する規則性を研究する言語学の一領域。
統辞論、構文論。

意味論

1、言語学の一分野。語や句・文などのあらわす意味、その構造や体系性を研究するもの。
2、記号学の一分野。記号とその指示対象、あるいはそれが引き起こす反応の関係を研究する。
3、論理式の解釈、文の真数値を決める原理、を研究する論理学の一分野。

語用論

pragmatics、記号論の一部門。記号ないし言語表現と、その使用者・解釈者との関係を取り扱う。

重文

compound sentence、合文。主語述語の関係が成り立つ部分が、対等の資格で結ばれている文。
花は咲き、鳥は歌う。

複文

complex sentence、主節と従属節で成立する文。
誰もが「雪がふる」と思っている。∴雪が降る、が従属節である。

単文

simple sentence、主語と述語の関係をひとつだけ
含む文。一文節から成り立つ。
花が咲く。

文章の関係

一対一：一文一義主義

多対多：複文一義、一文複義、複文複義主義

節

主語述語の関係の一区切り。

名詞節

「こと、この、という言葉でまとめられる節。

例…君が笑うこと。

大橋洋一編、他『現代批評理論』より引用

異化と自動化

小さな「不確かな」子供のように（村上春樹）

のように、一見不自然に思う表現を用いることを、文章の形式をゆ
がめること、異化という。

自動化とは、そのような「不自然な」表現を繰り返し用いることで
読者がそれになれてしまうことである。

シクロフスキーより

プロットと筋

- ・プロットⅡ物語の展開する順番
- ・筋Ⅱ物語の出来事の発生順

ロシアのウラジミール・プロップによる、魔法民話の登場人物の分類

敵対者

贈与者（何かを与える）

援助者

探索されるもの（王女）とその父

派遣者

主人公

偽主人公

A・J・グレマスによる、主人公と物語の登場人物の関係

主体／対象

送り手／受け手

補助者／敵対者

サルトル『文学とは何か』より

書くと言う行為は、単に文字言葉を用いて何かを表すのではなく、何かを言うことでその状況を帰ることである。

その行為は潜在的に、読者の存在を内包している（Ⅱ読者が居なかったらその行為は成り立たない）ので、作家はなぜ、誰に向けて、書くのかということについて常に責任がある。

ロラン・バルト『作者の死』より

作者は作品の意味を保証する神ではない。

読者こそが、その作品の意味を、多様な解釈で生み出す生産者である。

『作品からテキストへ』より

作者が世に出した「テキスト」は、彼の意図が書き表された「作品」ではなく、あくまで様々な「他のテキスト」が折り重なっているだけの多層的、多次元的な遊戯の場である。

読者がその遊戯の場で戯れて、そのたびに異なる意味を産出していくのだ。

以上。

新城カズマ『物語工学論』による、主な登場人物の分類の引用

さまよえる跛行者（Ⅱ何かが傑出、欠落した人物（非対称性を持つ人間）が旅に出る）

塔の中の姫君（Ⅱ自分での解決が難しく、助けを求める者）

二つの顔を持つ男（Ⅱ対立する二つの概念の間で悩んだりうまく立ち回っている者）

武装戦闘美女

時空を超える恋人たち（Ⅱ）

危ない賢者（Ⅱ強い自我と高い知性を持ち、欲望のみを追い求めるものたち）

創造主を滅ぼすもの（Ⅱ自分を生み出したものに自由や愛を求めたり、復讐しようとする者）

以上。

森本誠一『小説の書き方』より

「プロットの立て方」 流行作家のプロット作法

短期発想型

何かのきっかけでぱっとひらめく。たとえば電車から降りたとき、友人の言葉の断片、街角ですれ違った女性の香水の香り、突然吼えかけた犬など

出会い型

人間、場所、資料に出会うことで作品のプロットを立てる

長期構想型

何年、あるいは何十年と作者の心の中に温められ、時至り、孵化する作品。

バリエーション型

他の作家や先行作品、あるいは映画、演劇などの影響を受けて作られるプロット。

サマーセット・モームの『月と六ペンス』など

最先端専門知識型

まだ世の人に広まってない最先端の知識からヒントを得る作品。作者にかなりの予備知識、情報と取材力が求められる。

同時進行型

モデルとすべき人物、事件、現象と同時進行しながらプロットを作り、作品を書く。

スランプの種類と脱却方法

完全スランプ まったく何も書けない。

不振 書くには書くが、何を書いても自分に納得がいかない

低空飛行型 書けば書くほど悪くなっていくような気がする

不満型 作品に自信があっても、世間に評価されない

・ある場面の描写で立ち止まったときは、最も難しい箇所を保留して、先の場面を書き進めると難所をすばりと貫通できる。
以上。

・動詞と形容詞 ― 戦闘シーンを描写するには ―

女「戦闘シーン？」

男「そう、一瞬一瞬を書くシーンでのテクニックを説明するね」

女「私が君に襲われるわけだ」

男「まずは以下の文を比べてほしい」

女「スルーっすね」

1…青年は彼女を追った。それを天使は阻止した。

2…彼女を追う青年。それを阻止する天使。

1と2の違いは何か。情景を描写する意味では、どちらも同じ場面を描写しているに過ぎない。何が違うのか、は難しい。

女「えっと、1は動詞だけど、二番は体言止めになってるとか？」

男「その通り。まずはそこだね」

女「えーと、体言止めは、その名詞を強調するときに使える修辞法じゃなかったけ？」

男「たしかにそうだね。でも、もう少し詳しく話していこう」

1, (プライマリ) …青年は彼女を追う。それを天使は阻止する。
(時制をそろえる)

1, (セカンド) …青年は彼女を追う。Andそれを天使は阻止する。

2…彼女を追う青年。それを阻止する天使。(体言止め)

2, (セカンド) …彼女を追う青年。Andそれを阻止する天

使。

セカンダリは説明用だから無視していいよ。この二つの違いは何かな？

結論を言うと、時間が違うんだ。

女「え、時間？ 時制をそろえたじゃん」

男「いや、時制は一緒だけど、継続時間が違う」

男「1'の方は動詞（Verb）であり、作用動詞。作用動詞とは、主語が一連の動作を何かに働きかけている動詞だ」

女「私が君を蹴る、みたいなの？」

男「当然、一連の動作が完了するまでに時間がかかる。君が何かを蹴るとき、足を振りかぶる一連の動作を完了して初めて、蹴る、といえる」

女「ちくしょう、蹴りたい背中だよちくしょう」

青年は彼女を追うために行動を起こし、実際に追いかけるという一連の行動を完了させている、ないしは遂行中である。

それを天使が阻止している。天使が青年を「阻止する」というアクションを継続して行っている、ないしは成功させているわけだ。今ダッシュしてるんだ。それを天使が阻止するんだ。

女「はいはい」

つまり、1'の方は「まず、青年が追いかけた。次に天使が阻止した」という意味。

僕たちは「青年が走り出す前↓走っている状態↓天使が阻止する

前↓天使が阻止する」という一連の流れを見ているわけになる。

女「おお」

「青年が実際に追いかけた分の時間は経過している」といえる。
青年がダッシュした分、一秒や二秒、あるいは0・1秒経過している。

男「んで、2の方は連体修飾語法∥形容詞 (A d j e c t i v e) 。
形容詞は物体 (O b j e c t) の状態を説明するものだ」

女「この本は今開いてます、みたいな？」

男「ん、まあ近いね。でもそれじゃ、作用動詞の状態動詞化になっ
てるわけだから、正確には開いているほん、の開いている、が形容
詞」

女「開いている状態でーす、ってことか」

男「青年は、彼女を追いかけるという状態にある∥彼女を追いか
けている、その一瞬を切り出した状態だ。」

天使もまた、青年を阻止するという状態にある∥青年を阻止し
ている、その一瞬を切り出した状態にある」

ダッシュしている青年がいるんだ。それを阻止する天使がいるん
だ。

2の方はA「青年が追いかけるや否や、天使が阻止する」という
意味にもB「まず、青年が追いかけた。次に天使が阻止した」とい
う意味にも取れる。

女「まじで？ それってなんで？」

Aの解釈は、青年、天使という二つの名詞を、並立のAndでないで解釈する方法。

「青年が走っている状態、天使がそれを阻止している状態」という一瞬を眺めている。

女「並立のAndってあれか。赤い本、青い鳥、みたいな同時列挙のことか」

男「そう」

Bの解釈は、青年が走っていると、天使が阻止した、という等位接続による順番列挙の形になってる。

「青年が走っている状態（が僕たちに見える）↓天使がそれを阻止している状態（が僕たちに見える）」

女「パソコンの電源を入れる（状態の）男。そしてキーボードをたたく（状態の）男。

この、そして、が同時列挙じゃなくて、順番列挙、というわけだね」

男「そうだ。きみは写真を二枚見ている。電源を入れた僕、キーボードをたたく僕」

女「ははあ、んでAのほうは一枚の写真か」

男「そういうわけさ」

女「え、でもそれじゃAの解釈間違っってない？青年が走り出したのと天使が阻止したのは同時にじゃなくて、青年↓天使の順番にでしょ？」

正確には写真二枚になるじゃん？」

男「いや、そうでもないね。……あっち向いてホイ！」

女「ホイ！」

男「はい、今君が向いてる方向にはカップルがいます」

女「いませんけど？」

男「ぱちーん！男をぶっている女。女にぶたれる男」

女「ざまあみやがれ」

男「君はぱちーん！の瞬間に二人を見ました。はい、同時です」

女「……つまり、青年と天使を見たとき、その瞬間では青年は走っていて、天使は阻止していた、ってこと？　だから一枚の写真でOKと」

男「そうだ。ここでさらに、1'を1に戻して考えよう。過去形もしくは過去完了ってことは、小説を読む人にとってはこれは過去の話だということだ」

1…青年は彼女を追った。それを天使は阻止した。

2…彼女を追う青年。それを阻止する天使。

女「うーむ、つまりこうか。1は『あんなことがあったんだー、したらこんなことがあったんだよ』で、

2は『今日の前であーんなことやこーんなことになってる』」

男「痴情のもつれみたいに言うな」

女「家政婦は見た」

男「まあ、つまりだ。結論として、緊迫感のあるシーンは体言止めがいい！　ということだ」

女「見事なスルーっすね」

男「戦闘シーンは体言止め！　一瞬一瞬の熱い攻防を描写するには、動詞だけでは『遅すぎる』」

女「なるほど。戦闘の緩急のつけ方の一つとして、動詞の活用と形容詞の活用をしろってことだね」

・文の長さの目安とは

男「文の長さの目安は、大体一文1〜3節、多くなっても一文4、5節だろうね」

女「節？」

男「女はかわいい、が一文節」

女「いいね」

男「女は照れて、こちらを見た、が二文節」

女「述語が二つに増えたか」

男「女は照れつつ、そのにやけた顔を崩さず、体をこっちに寄せてきた、が三文節」

女「いや、そんなことしてないっす」

男「もしこれ以上増やそうものなら、全体の文字量と読みやすさを考えなくてはならない」

女「そこら辺は匙加減じゃない」

男「たとえば、こんな文章。女はその顔を赤く染めつつも、気恥ずかしさを悟られないように体を寄せて、密着したままこちらを見上げて頬を緩めた」

女「そろそろやめてくれる？」

男「さて、文節について解説しよう」

文節とは主語述語の単位で括れる区切りのことだ。

たとえば「残酷な天使が社会運動を起こした」は一文節。「この空を抱いて輝く少年は神話になる」は二文節。

『この空を抱いて And 輝く／少年』というように、『抱いて輝く』が少年を修飾している従属節だ。

従属節と言うのは、主節を修飾している節のことだ。主節は文の

根幹の節だね。

この場合の従属節は、「少年」という名詞を修飾しているから、連体詞節という。英語では、名詞を修飾している節は、一般には形容詞節と言う。

この場合の主節は「少年は神話になる」、の部分だね。

女「それわざとやってるの？　ねえ、わざとやってるの？」

男「なんらの関係性も引用性も無いし、ましてや名誉毀損や権利侵害を起こしているわけでもない。何かを彷彿させたとしても、それはこのコンテキスト上ではシニフィアンとシニフィエの合一とは言えない」

女「はいはい、何かを連想しても、その連想したものは私たちの主張とは無関係って言いたいんでしょ」

男「お、ソシユールを勉強しているとは」

女「ソシユールの言葉を借りるなら、どのようなシニフィエⅡ言葉であれ、シニフィアンⅡ対象を完全に言い表すのは不可能、だからその理論は破綻してると思う」

男「まさか、たしかにこの引用はある意味メタ的な意味を持つが、そのメタ性は『ある共通の理解』がある人間にのみ理解できるものだから、なんら侵害はしてないだろう」

女「その『理解できる』側の人間の内輪ネタってことね」

男「そう。和歌における引き歌の概念よりも、よっぽど健全なお話さ」

女「とか言いつつも、何らかの意味合いを込めてることは認めてるわけだね？」

男「デリダの議論では『テキストの外には何も無い』だ。テキストの持つ意味合いはテキストどおりさ。そこになんら他意はないことをここに宣言する」

女「ぐぬぬ、字面上は問題ない、問題ないが……」

男「さあ、話を進めよう」

さて、会話で出た例文を節に分解してみると、

「女はその顔を赤く染めつつも、／『気恥ずかしさを悟られないように』
／ 体を寄せて』、／『密着したまま ／ こちらを見上げて』
／ 頬を緩めた。」

の6文節。

そのうち、A『気恥ずかしさを悟られないように』B『密着したまま』の二つは従属節、その他の節は主節だ。

Aは『体を寄せて』を、Bは『こちらを見上げて』を副詞的に修飾している。（副詞Ⅱ用言Ⅱ述語を修飾する言葉）

この文の主節は四つ『染めつつも』『体を寄せて』『こちらを見上げて』『頬を緩めた』だけど、四つともが等位接続で結ばれており、対等な関係にある。

このように主節が複数ある文を「重文」と言い、主節と従属節がある文を「複文」という。

つまり、この文章は重文であり複文でもあるわけだ。ちなみに、主節が複数あっても一文として数えることが出来る。

この文章は相当長い。長く感じた原因は文節がいくつも重なっているからだ。それでも論理が混乱しないのは、主語が統一されているからである。

つまり、こういうことだ。一文の間で主語があっちらほっちら移り変わっている場合は、これを分かりやすく書き直すか、文節を文に分解するか、をすることがある。

女「うん？用は述語ごとに一つの文節に区切られるのかな？」

男「まあ、その解釈もあながち間違っではない。用は文章を「ごちやごちや」にしなかつたらいいんだ」

女「うーむ、最後に来て投げやりな」

男「一文の内の文節の数に気をつけましょう、ということさ」

・絶対描写と比較描写

男「絶対描写と比較描写、ねえ」

女「そう、それがまさしく大切だ。片方は抽象的に、もう片方は具体的に表現している」

男「ふむふむ、なるほど」

まずはここに美しい女の人があります。

男「ストップ。自画自賛はやめたまえ」

女「そんなんちゃうわ!」

それを絶対描写と比較描写で書きます。

絶対描写では単に「美しい女性」と書くわけだね。

比較描写では「街行く人の10人に1人は振り返って確認してしまいうほど美しい女性」「クラスの女子の平均よりも美しい女性」と書きます。

男「街行く人の9人は俺かー」

女「振り返こうぜ」

男「過去は振り返らない主義でね」

女「ふりかけ野郎め!」

男「ふりか、しか合っていないっす」

絶対描写の利点は、「その属性が付与している」ということのみを純粹に伝えられる点で、詳細はぼやかせます。

また、文章のテンポ上、人物を描写するのにいきなり詳しく書きすぎると、読み手が読みづらくなるので、ゆっくりゆっくりと長期的に描写する手法で役に立ちます。

女「最近ゆっくり描写する小説が少ないんだけど！」

男「キレる若者」

女「いきなり何なのさ！ 『委員長である彼女は、青い髪のポニーテールを腰まで下げていた。目は釣り目、薄い化粧を施しただけの素顔。』

めがねが利発的で、まさに委員長のようだった。スリーサイズはむにゃむにゃ。服装はきっちりしていて、寸分の隙もない。ひざ下までスカートのすそが伸びている。

赤い髪留めが彼女のチャームポイント。性格はツンデレ』とかいきなり言われてさ、

次から『青髪の委員長は』とか『青髪の彼女は』しか説明しないのはなんでさ！ 一回こっきりで覚えろってか！ 暗記か！

男「委員長と言えば黒髪の三つ編みおさげだろ！」

女「知らんわ！」

男「なんかその例じゃ、作者は青髪しか重要だと思っただけみたいだね」

女「こんな描写もできるのにね。『委員長である彼女は、腰まで下ろしたポニーテールの青い髪が印象的だった。それでいて、利発的なめがねが映えていた。』としておいて、

後から『委員長は、赤い髪留めを弄りながら、』『委員長は、その隙のない服装をはたいて、』『委員長は、ひざの下まで降りたスカートをめくりながら、』とか」

男「最後待て」

女「『委員長は、そのツンデレな性格を存分に発揮して、』『委員長は、そのスリーサイズでむにゃむにゃむにゃ』」

男「まあ、あれだね。最初は視覚的な要素の強い、『色』と『顔』を描写したわけか。それで後の細かい部分は、後からじっくり描写すると」

女「『委員長は、最後にはその釣り目を潤ませて、』」

男「俺のスルーをスルーした!？」

女「『委員長は、いつも彼女がしている薄い化粧を軽く整えて、』」

男「えーと、つまりアレです。文をいくつも跨いで描写することで、一部にだけ力を入れるという、力のむら、をなくす方法ですね。

利発そうなめがね、がまさにそれですね」

女「委員長、可愛かったぜ」

男「めがねを詳しく書いてもつまらない。彼女がなんとなく利発そうにみえるだけでいいから、絶対描写にしたわけだ」

女「逆に比較描写は、盛り上がる部分に使うべきだね。作者は青髪を大切にしたいわけだから、こう書くべきだ。

『彼女の髪は、薄くつやがかっていて、それでいて深夜よりも深い闇の青色が、その一本一本に宿っていた。ゆれる度に、その色が生きていることをひしひしと感じるぐらいに、ずっと深かった』」

男「つやってポマードですか」

女「ひどい」

男「つまりあれだね」

女「うん、つまりはね」

視覚描写で重要視されるのは、色と顔、形です。

そういうものを詳しく描写するときは比較描写Ⅱ相対的描写をしますね。

逆に、心情的な描写を視覚描写で表現するのは、特別な意図がない限りは絶対描写が多いかと思うんだ。

比較描写を使うと、力が入るので、連続して力が入っているような力んだ小説にならないように、なるべく心がけましょね。

女「以上、顔形良しの色女より」

男「まあ、比較と言う概念が日本にはないのかもしれない。なんせ今まで『描写を詳しく書け!』の一言で済まされた問題だからね」
女「ぶっちゃけ一言で言えばそうなんだけどね」

・時間の考えかた

男「日本の従来の小説は、時間の考え方が非常に甘い、と言わざるを得ない」

女「時間？　つまりどういうことさ」

男「紙媒体の小説と違ってネット小説は空白をふんだんに使えることで、その時間的推移を表現できる。また、話の本筋とは関係ない描写を詳しく書くことで時間の推移を表せる」

女「本筋と関係ないって、これかな？　『貴方は実は私と血が繋がってないのよ』とか言われた息子の視点で

『彼女の言葉は、どこか非現実的な響きに聞こえた。彼女の顔は俯いて前髪に隠れ、その陰りは読み取れない。あるいは、その細い髪の毛の向こうにはひどくうつろな彼女の顔が見えるのではないかと私は思った。』

存在意義をそこにしか見出せないでいる彼女のことだ、きっと自己否定された気持ちにあるに違いない。彼女の存在意義など、作ろうと思えばいくらでも作れるだろう。

彼女自身もそうとは頭でわかっているはずだ。私の優柔不断さと不器用な優しさぐらい、それとなく察しているはずなのだ。ただ、そんなことが彼女の救いになるのかは、果たして私には見当が付かなかった。』

みたいな？」

男「今回はシリアスだね」

女「『私は、そのまま彼女のやつれた髪を持ち上げ、慈しむように声をかけた。『愛してるよ、姉さん』』」

男「そこは妹だろうが！」

女「知らんがな！」

男「母親だと思ったか？　実は妹なんだぜ」

女「姉の方がいい」

男「文章が現在形だったり過去形だったり、いろいろあるけれど、当然そこには意味があるはずなんだ」

女「ははあ、意味ね」

男「過去形と現在形の違いについてだけど」

過去形で描写がされている場合は、「そういう事実があった」という説明の形。昔にこんなことがありました、という伝聞を示し、古文では「けり」で表現する。

君の言葉を借りると、「彼女の言葉は、どこか非現実的な響きに聞こえた」「ただ、そんなことが彼女の救いになるのかは、果たして私には見当が付かなかった」がちょうどそれだね。

時間的に考えて「読者から遠く離れている」ものだと推測できる。

一方現在形で書かれているのは「語り手が現在だと思っている」状況の説明の形。

「彼女の顔は俯いて前髪に隠れ、その陰りは読み取れない」がまさにそれだ。

これにはいくつも種類がある。これらが複合しているケースもしばしばある。

1.. 一般普遍の真理の説明。

2.. 登場人物から見た人の動作。

3.. 時制の引き付け。

女「一般普遍の真理ってなんぞ？」

男「まって、まずは2について説明するほうが早い」

2については、A「彼女の顔は俯いて前髪に隠れ、その陰りは読み取れない」

B「存在意義をそこにしか見出せないでいる彼女のことだ、きっと自己否定された気持ちにあるに違いない。彼女自身もそうとは頭でわかっているはずだ。私の優柔不断さと不器用な優しさぐらい、それとなく察しているはずなのだ」

の部分だね。

Bは私が彼女のことを見て、彼女の動作を説明している、あるいは推察している。

女「こんな彼氏いいよなあ」

男「俺」

女「はい、続きを」

男「……うむ」

重要なのはAの方だ。Aは彼女が俯いているという動作をしていることと、陰りが読み取れないという状態を、私視点で語っている。こっちは他にももう一つ意味がある。

「読み取れない」というのは私の動作である。しかし、ここ以外に動作が過去形である。これはいったい何を表現したかったのか。

女「多分、あれだ。語り手は野球の解説をやってるんだ」

男「お？」

女「今2ボール2ストライク、1アウト、パワプロ投手の投球は非常に鋭く、いとも簡単に2ストライクを手に入れました。ここまで過去形」

男「ばわ、いやなんでも」

女「打った！これは大きい！大きいぞ！のびる、のびる！どうだ、大きく伸びる！外野が走る！フェンスはそこだ！どうだ、はいるか。入るか、入るのか！？入ったーっ！起死回生のホームラン！

満塁ホームランです！これは大きい！これはほぼ現在形。過去形は二つしか使われてないのに、時間は進んでいる」

男「ふーむ、なるほど」

女「つまり、語り手がnow、今を語っているときは、現在形。さっきのでは、順番に現在を語っていったって、時間が進んでる、と」

男「そのとおり。そしてAだけを現在形にした意味は？」

女「当然強調したいから！」

男「正解。時制をずらしてスポットを当てる手法でもあるし、あるいは読み手を語り手の時間にぐっと近付ける狙いもある。と言う意味でAは2と3でしたー」

1については

C『今この地球は回っている。どこかで朝が始まっている。澄み渡るように冷たい朝もやの気が、街行く人の肺を満たす。どこかで電車が走る。人に押しつぶされそうになっているサラリーマンがいる。』

世界が回るには、人が回るしかない。歯車一つが欠ければ、どこかがいびつになる。それでも世界は、たった一人なんかどうでもいい。

人が回る場所だなんて、世界とはぜんぜん関係のないところ。勝手にこまのようにきりきりまいに回って、勝手に崩れて足を折る。このとき世界にとって人間は、朝もやを消費するだけのベীগوماでしかない。』

の「今この地球は回っている。どこかで朝が始まっている」の部分と「どこかで電車が走る」の部分。

女「どんなときでも成立するから、かな」

男「そう、これら自体はどんな現在を切り抜いたとしても、おおよそ成立することだろう？」

もちろん『どこかで朝がはじまっていた。どこかで電車が走った』にしてもいい。その場合は、『「どこか」という場所では朝が始まり、電車が走っていたのさ』、という過去の説明になる」

女「なるほど。現在形にすることで、こういう事実があつた」んだというように動作を終わらせる、じゃなくて、続かせる。

こうすることで、今この地球が回っているのと、サラリーマンが押しつぶされそうなのは同時ですよ、という意味がでるね」

男「そうだ。ちなみにこの例文は、2の意味も含んでいる。全体が『語り手Ⅱ世界視点から見た、物体の動作の説明』になっている。まあ、これはどうでもいいとして」

3はもう説明したよね。時制をずらしてスポットを当てる。ところがCについては、強調の意味ではつかっていない。

つまり、現在形にするのは必ずしも強調の意味を含むわけではない。一番最初の例は基本が過去形だったから、一箇所現在形にすることで、そこが強調されるわけだ。

Cは、「このとき、世界にとって人間は、」のこのとき、を薄く延ばして説明しただけの、その情景を説明した文章。

女「つまり、昔説明してたばちーん！の写真のこと？」

男「いや、むしろムービーだね。このとき、っていうのは一瞬じゃない。時間的広がりがある」

女「ああ、ここは動詞が連続して用いられているからね。しかも同

時に。一連の動作を使って『このとき世界にとって』のこのときをあらわしたから、『このとき』は比較的長時間になるね」

男「しかも、それぞれの動作の開始時間、完了時間はかなりまばらだ。あるムービーを眺めたときにだけ、みんな同時にそれぞれの動作をしている最中ってだけで、共通点は無し。」

つまり、このとき、という時間はかなりあやふやな時間である」
女「世界にとっての、人間のあやふやさを説明した文にもなりうる訳か」

男「とまあ、時間については非常にいろいろとある」

女「ふむ」

男「不必要な文章はテンポ的に削ったり、逆に緩急を付けるために無駄に描写を太くしたり薄くしたりする。……しかし！ネットの文章は贅沢ができる！緩急つけたかったら改行改行改行！」

女「うむ、確かに……」

男「プロってその点すばらしいと思います」

女「ですよねー。改行便利なんです、ごめんなさい」

文章の過去形や現在形の意味の違い、時間的含みを持たせる動詞と一瞬を指し示す連体修飾語の違い、等位接続による順番列挙の時間経過、などなど。

「カップが割れた」 「カップが割れる」

「カップが割れた」 「割れたカップ」

「カップが割れる。音が響く。僕は立ちすくむ。彼女は微笑む。店内の時間が止まる。」「別れよう」の言葉がリフレインする」

男「とにかく、時間に対しての認識ってのは、かなり重要です。時

は金なり」

女「沈黙は金なり。つまり改行も金だね！」

男「それはちよつと違う。そもそもかねときんだし」

新情報と旧情報

新情報が連発されると読者は混乱する？

男「というわけさ」

女「新情報と旧情報って英語かよ」

男「まあ、英語の文章は構造的に、非常に論理的だということから、英語の視点から日本語の構造を研究するのもいいことだよ」

女「今はポスト構造主義の時代っすよ」

男「話も身長も小さなことを気にしては議論が進まない。さあ、例題を出そう」

女「おい、身長は関係ねーだろが！」

男「ははは」

女「むぎゅ」

たとえば、ここに青年、彼女、という登場人物がいるとして、

向かいのおばさんの会話相手になっている青年は、遠くの学校で生物の授業を受けている彼女の大人しい性格に似つかない大胆な発言を思い出し、やせこけた頬を持ち上げて、人目を気にする彼には珍しく、大声で笑った。

の場合、新情報が

青年…『向かいのおばさんの会話相手になっている』

彼女…『遠くの学校で生物の授業を受けている』『大人しい性格』

『大胆な発言』

青年…『やせこけた頬』『人目を気にする』『大声で笑う』

とたくさん並んでいるから読みにくい。

新情報がならんでいるから、一度に読者が情報を処理しなくては

ならない。これが読みづらさの原因である。

逆に、新情報を一文あたり1，2個数に絞っていけば、読みやすい文章になる。

女「新情報、ね。旧情報ならいくつでも並べていいの？」

男「いや、そうとは言えない。旧情報とはいえ、微妙にニュアンスや言葉が変化してたら、それも立派な新情報扱いだ」

女「大きい本がある。この大きな本は、貫いものだ。みたいな？」

男「その程度の修飾語なら、新旧なんか気にしなくたっていいさ。かさばって仕方がないこの本は、貫い物だ、ぐらい変化してたら新情報かも」

女「ふむ」

これはまだ許せる文章である。理由は平易な名詞を使用していること。それと、新情報を順番に処理していけば意味がつかめること。この二つである。

だから、この文章は文節ごとに細かく分けていけば、分かりやすい文になるだろう。

では、この文章はどうだろうか。

見知った向かいのおばさん相手に、とりとめもない観客の居ないトークショーをくり広げている青年は、遠い生物の授業を設けている教室の隅にいる彼女の、おとなしい性格の割りに大胆な発言を思い出して、やせこけた頬が持ち上がって、別にそうするつもりはなかったのだが、人目を気にする彼には珍しいことに大声で笑った。

これは非常に読み辛い。内容が先ほどの例題と同じだから、まだ救いがあるだけだ。初見ならばまず分からない。

出だしが

『見知ったⅡ動詞による副詞的連体修飾（非正式名称。主語がおばさんではなく青年、つまり被修飾語と副詞内主語が一致していない、という修飾）（例…彼は会話が変だから、思わず「笑ってしまう」ような人だ。笑うのは彼じゃなく、あなた）』

『向かいのⅡ連体語』

という、別種類の修飾語が並立しているのが、辛い。

見知ったおばさん、向かいのおばさん、なら分かりやすい。見知った おばさん、の間に「向かいの」、をねじ込んだのがダメだった。

一般的に、修飾語の間に無関係な言葉を入れるのは、きわめて悪い。

理由は簡単、新情報を複数同時に処理しなくてはならない。テンポを損なうのだ。

女「え、でも『とりとめもないくだらない話』は普通じゃない？」

男「とりとめない、くだらない、がどちらも同じ形容詞だから違和感が少ないのさ」

女「下品なくだらない話、とか」

男「形容詞と形容動詞、どちらも同じものⅡ話を形容しているから大丈夫」

女「男が話すくだらない話」

男「男が、って最初に指定してある分だけまだマシだね。まあ、こころへんは感覚だよなあ。実際、見知った向かいのおばさん、ぐらいなら普通に読めちゃうし」

女「まあね。でも連発は注意しましょうってことだね」
男「せいぜいそんな所かな」

同じ理由で『とりとめもない』『観客の居ない』もアウト。

『遠い』『生物の授業を設けている』教室、もアウト。そもそも設けている、という言い方が一般でない。

『やせこけた頬が持ち上がった』は、こっちは主語が変化しているのでアウト。

この文は『青年』が主語だったはず。『やせこけた頬』が主語に変化するのは不自然。変化する理由（強調したかった、など）が必要である。

『別にそうするつもりはなかったのだが』は挿入句として働いている。文章全体を副詞的に修飾している。

けれどもこれは、テンポを損なっている。

理由は簡単。今までは新情報を順番に処理していけば意味がつかめる文だった。

しかし、これは違う。

「そうするつもり」の「そう」が指示する内容が後ろに回っている（後方照応）ので、一旦情報処理をとめてキープしなくてはならない。

その後に続いて『人目を気にする彼には珍しいことに大声で』と新情報が入っているので、キープしながら情報を処理しないといけない。

これが混乱の元である。このように情報処理の途中に後方照応の言葉をぽん、と置くのは、テンポを崩す元になる。

女「こんな女がいる。難しい説明には必ず分かりやすい例を持ち出す女だ。これが後方照応って奴かね？」

男「そのとおりだよ、いい子いい子。大体の後方照応は後ろを強調する効果がある」

女「感謝したまえー」

男「ははー。さてと」

女「なんてドライ」

分かりやすく改定して、

青年は、向かいのおぼさんの会話相手になりながらも、別のこと、今遠くの学校で生物の授業中だろう彼女のことを思い出した。

おとなしい彼女の発言とは思えない大胆な発言を思い返して、やせこけた頬が持ち上がる。

人目を気にする彼には珍しいことに、青年は大声を上げて笑った。

これぐらい意味を薄くしたら、まだ分かりやすくなる。

別のこと、は分かりやすくするために入れただけの無意味な言葉で、削除していい。

女「無意味な言葉は分かりやすく整理するための言葉、ねえ」

男「もちろん言葉としての意味は無いが、文章としての意味は生まれる。そう、言葉の緩急が文章のうねりであるからにはね」

女「がつつくだけじゃなく焦らすことも大切なさー」

男「反省します」

女「今日はゆっくりの日で」

男「というわけで、新情報と旧情報でした」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0339w/>

高校生による小説の書き方 対話講座

2011年10月8日18時19分発行